

中学生・作文 愛媛県砂防ボランティア協会会長賞

「あの日を忘れない」

今治市立伯方中学校 2年 ^{むらかみ}村上 ^{ここみ}心海

西日本豪雨で多くの被害を受けたあの日。私たちの住む伯方島も、大きく変わり果ててしまいました。山の土砂が流れて埋もれてしまった家。冠水してしまった道路。今も、思い出すだけで胸が痛みます。

七月五日。こども園での職場体験初日でした。元気な子どもたちと、プールで遊んだり、園庭で遊んだり、とても楽しみにしていたのにあいにくの雨でした。時には激しく降る時間帯もあり、「梅雨だからしょうがないか。」と思っていたのを覚えています。

七月六日。朝から大雨警報が発令されていました。そのため、職場体験は中止となってしまいました。「子どもたちとたくさん遊べると思ったのにな。」ととても残念でした。結局その日は学校にも行けず、降り続く雨に、不安を感じました。

そして、あの七月七日。その日も大雨警報。部活に行くこともできず、仕事が休みだった父と一緒に家にいました。テレビの報道では、しきりに、「今まで経験したことのないような豪雨が予想されます。土砂災害、川の氾濫には十分に注意してください。」

と呼びかけていました。母は、仕事に行く前に、

「家の裏山が心配やから気を付けとってね。何かあったら中学校に避難するんよ。」

と、防災バッグと貴重品を父に預けていました。私は、こんな大変な中仕事に向かう母がとても心配で仕方がありませんでした。

夕方、仕事から帰ってきた母が、

「島中が大変なことになるとるよ。そこの道路も土砂だらけになるとったよ。」

と、慌てて家に入ってきました。しばらくして伯母から、祖父と連絡が取れない、と電話がかかりました。心配になり、みんなで祖父の家に行くことにしました。

祖父の家に近づくと、もう少しのところでもいつもの道が冠水していてびっくりしました。仕方なく車を近くに置き、歩いて行くことにしました。長靴を履いているから大丈夫だと思っていたのに、すぐ水が中に入り込んできました。やっとの思いで冠水しているところを通りぬけ、角を曲がった時、ありえない光景が広がっていました。いつもの道が、土砂でいっぱいだったのです。土砂で足をとられながら、やっと玄関に着きました。

「お父さん！」

母が叫びました。家の奥から祖父が出てきて、みんなほっと胸をなでおろしました。

「電話しよったんじゃが電波が悪くてつながらんかったんじゃ。えらい事になるとるわい。」

と、困った様子の祖父。私も、その変わり果ててしまった景色に、一度目を疑いました。そこには、川のようにものすごい勢いで土砂が流れる水路、流れてきた土砂が積もった庭、半分土砂で埋もれてしまった温水器……。いつもとは全然違う景色が、そこに広がっていました。被害があったのは外だけではなく、中にまで及んでいました。大量の水が流れ込み、床下浸水となっていたのです。床が高かったため、床上浸水とはなりませんでしたが、あと少し水位が上がると危ないところでした。涙ぐんでいた母ですが、

「お父さんが無事でよかった。」

と、一安心していました。

次の日から、みんなで土砂の撤去作業に取りかかりました。まず、家の周りの水路にたまった土砂を掘り出していきました。取っても取っても減らない土砂。近所の人たちと取った土砂は、みるみる山のようになっていました。シャベルを握る手がしびれてきた頃、知り合いの人たちが応援に来てくれました。すると、土砂で埋もれていた道路が、少しずつ見えてくるようになりました。

「あともうちよつとやね。」

と、励まし合いながら作業を進めていきました。同時に、家の方では、床下にたまっていた水をポンプで抜く作業をしました。完全に水を抜き終わるまで二日間かかりました。そして一週間後には、ボランティアの方が来てくれて、道路の土砂はなくなり、崩れた場所に土のうを積んで応急処置もしてくれました。そのおかげで、今では完全復旧とまではいかないけれど、元の姿を取り戻してきました。

今回の西日本豪雨で、私たちは今まで経験したことのない被害を受けました。今でも、この炎天下の中復興作業を続けている人たちもいます。自然災害には、私たち人間は無力ですが、山の斜面の補強工事をしたり、危険箇所を把握したりすることは可能です。また、日頃からの備えと心の準備をしておくことで、いざという時に対応できると思います。まさかのことが起こってしまう時代。どんなことにも対応できるよう、一人一人が防災意識を高めておくことが大切だと思います。